

身分の差の始まり

古墳時代前期（4～5世紀前半）に市内で開発が進み、田畑の規模が大きくなると、水を引くために川に堰を設け、水路を掘るなどの大規模な土木工事が必要になったと思われます。工事を行うには、多くの労力が必要で、必然的に人々をまとめる指導者が生まれたと思われる。そうした指導者が、「市報ぎょうだ」9月号で紹介したような水に関わる祭祀なども執り行っていたと推測されます。

と推測されます。生業面と精神面の両面から人々を掌握していたと思われる指導者は、やがて富を蓄え、貧富の差、身分の差が現れ始めます。この身分の差が明確に現れるのが方形周溝墓と呼ばれる、指導者層の家族墓と考えられている墓の出現です。方形周溝墓は、正方形や長方形に墓の周囲を溝で区画して、その内部や溝の中に遺体を



小針遺跡の方形周溝墓

埋葬する家族墓で、区画内を1メートル前後盛土することもあります。

方形周溝墓は、弥生時代前期（約2千500年前）に近畿地方で出現し、古墳時代前期には日本各地に築かれるようになりま。市内では、弥生時代中期（約2千年前）に小敷田遺跡（小敷田）で県内最古の方形周溝墓が築かれ、古墳時代前期になると文珠前遺跡（白川戸）、高

池遺跡（共に樋上）、陣場遺跡（渡柳）、小針遺跡（小針）など市内各地で築かれるようになります。市内の方形周溝墓は溝が全周する、一部が切れる、四隅が切れるなど形はさまざまで、大きさも約9～26メートルと差がありますが、いずれも土器が供えられていたようです。なお、鴻池遺跡の方形周溝墓からは、土製釧（腕輪）が出土しており、希少な装身具を所持できる人物の墓であることが伺えます。こうした方形周溝墓を築いた指導者の中から、多くの集落をまとめる指導者が生まれ、次第に地域を治める豪族へと成長していったのではないのでしょうか。（文化財保護課 中島 洋一）

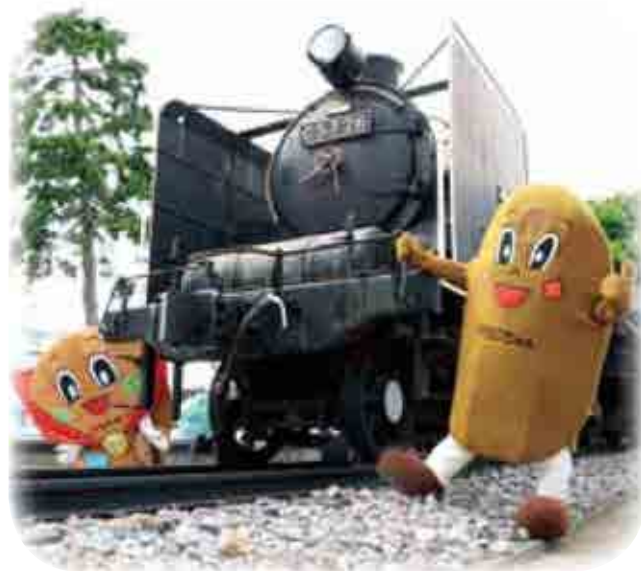
このコーナーでは、行田の歴史や名所、名物などを行田ゼリーフライキャラクターのこぜにちゃんが分かりやすく紹介します。



今月は、水城公園内に展示されているSLを紹介するよ。このSLの名前は「C5726」号で、旅客用列車として昭和13年に製造された蒸気機関車です。

昭和46年に引退しましたが、ちょうどその年にJ R行田駅が開業5周年を迎えたことから、その記念として、当時の国鉄（現在のJ R東日本）の協力をいただき展示することになったんだ。引退までに行った距離は約3百万キロメートル。地球を約74周したのと同じ距離というから驚きだね。

今では、行田のシンボリック存在としてみんなに親しまれているよ。



※管理者の許可を得て撮影しています。

**今月の表紙** 9月10日、群馬県上野村で行田市保健協会の会員12人がノルディックウォークを楽しみました。北欧フィンランドでスタートしたこのスポーツは、2本の専用ポールを使用して歩行運動を行うもの。この日は、ガイドの方に案内してもらい、集落や山間の小道を散策しました。参加者は、緑あふれるきれいな景色を眺めながら、さわやかな汗を流していました。

■市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）まで。  
■市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。  
■市報をCD-Rに録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）までご連絡ください。

